



伝え守り抜く 平和への願い



↑平和へのメッセージカード付き風船を、来場者の皆さんと飛ばしました。願いの込められた風船は、大空へ舞い上がりました

風化させてはならない事実があります。知っておかなければならない悲劇もあります。若者たちでつくりあげる邑楽町平和展では、毎年平和とは何かを問いかけています。

町職員労働組合の青年婦人部(31歳以下)の皆さんでつくる邑楽町平和展実行委員会では、毎年「邑楽町平和展」を開催しています。同展は、若者たちの手により企画から運営まで行われています。その最大の目的は、風化させてはならない過去の事実や、知っておかなければならない戦争の悲劇を次の世代へと語り継ぐためにあるのです。

昭和57年から始まったこの取り組みも今年で30年。県内でも、このように長く続く平和展は類がありません。今後、この取り組みが、どういう形で続いていくのか、若者たちの発信する未来へ向けた平和へのメッセージは、バトンリレーのように続いていくのです。

あの悲惨な戦争を体験して 今ある幸せが本当に夢のようです



松島七郎さん(店高原・28区)

まつしま・しちろう ●昭和5年生まれ。昭和19年、国民学校高等科2年のとき学徒動員。昭和20年満州で航空機の整備士として従軍。同年8月15日、奉天(ほうてん)にて終戦を迎える。

※1 学徒動員…工場などの労働力不足を補うために、昭和19年頃から学生を戦争へ動員。
※2 特攻隊…神風特別攻撃隊のこと。敵艦に必死の体当たりを行う部隊の通称。

戦争を経験された地域の人から話を聴くことが、今ある平和の尊さを気付かせてくれる近道です。今回、松島七郎さんが「当時、15歳だった少年兵が語る戦争体験」と題して、貴重な体験談を語ってくれました。

昭和5年、私は三男七女の次男として、貧しい農家の家に生まれました。兄はビルマ戦線で戦死。弟も5歳のときに病気で他界していたので、戦時中家にいる男は私だけでした。

長柄村国民学校(現長柄小学校)高等科に進学したときに戦争が激化。本当に勉強どころではありませんでした。高等科2年(中学2年生)のとき学徒動員が命令され、中島飛行機製作所で戦闘機の部品をつくる手伝いに駆り出されました。その頃はパイロットになって特攻隊に入隊を希望していました。国のために尽くしたいと強く思っていたのです。

昭和20年4月から、館林陸軍飛行場で勤務しました(現在の開拓と館林市にまたがった所)。ところが、3日後突然、満州へ行けという命令が下ったのです。

4月15日の出発の朝、長柄神社で村長をはじめとした地域の皆さんが、祈願祭を開いてくれました。皆さんの「万歳、万歳」の掛け声の中、出発しました。

富山県の伏木港から輸送船に乗り込んで、船は玄界灘を越え三日三晩航行を続け、朝鮮半島の清津港にいきなり下りました。清津から満州鉄道の列車に乗り、目的地の竜江省白城鎮平安鎮まで4日間。そこから、飛行場のあるホロンバイル平原へ向かいまいした。私たちは、飛行場で整備担当として働くことになったのです。

夜の不寝番(毎晩2時間交代制)のときは、残飯をあさりにくる狼が怖くてしかたなかったのが印象的でした。そんな生活を約3か月間送りました。

8月8日、突然ソ連が日本に宣戦布告。隣の飛行場が爆撃を受け火の海になってしまいました。私たちは着の身着のままトラックに分乗し、飛行場から逃げました。

やっこのことでした。着いた奉天で、天皇陛下の終戦を告げる玉音放送を聴いたのです。8月15日のことでした。逃避行の末、釜山からやっこのことで九州の博多港に上陸することができました。

今でも忘れられないのは、列車が広島を通過しようとしたときのことで。街は全て灰となって、鉄の塊になったSL機関車が、いくつも駅に横たわっていました。原子爆弾が投下された広島はまさに地獄でした。

8月31日、高崎の連隊に戻ると私たちに軍から解散命令が下りました。「自分の家は、あるだろうか」とも心配でしたが、中野駅に着くと、姉ちゃんたちが出迎えてくれたので一安心しました。

お袋は私の顔を見るなり涙を流しながら大喜びで、その喜びようは人一倍でした。軍隊に入るとき、「家には男がお前ひとりだから、どうか軍隊にはいかないでくれ」と大粒の涙を流していたお袋…。あの顔を私は今でも決して忘れることができません。

今の幸せが本当に夢のようです。戦争は本当に地獄。二度と起こしてはいけません。若い世代が私の体験談を、少しでも心にとどめておいてくれたら、幸いです。そして、戦争の悲惨さを伝えていってもらいたいと願っています。



→その場にいる誰もが松島さんの戦争体験談に聴き入っていました

戦時中の日本周辺略図

昭和6年(1931)関東軍(大日本帝国の陸軍)は満州事変を起こし、全満州を占領。「満州国」という植民地をつくりました。建国2年後、帝政を敷いたので、「満州帝国」ともいいます。清王朝最後の皇帝愛新覚羅溥儀(あいしんかくらふぎ)が帝位につきました。満州国は、日本の太平洋戦争敗北を機に中国に戻りました。



→戦時食の無料配布
※戦時中に食べられていた「すいとん」や「はったい粉あめ」、「脱脂粉乳」を無料配布。すいとんは、戦時中の味と現代の味を作り、来場者が食べ比べできるように工夫しました。



→「かわいそうなぞう」を題材とした朗読劇を行い、平和の尊さを訴えました



←パネル展示(ベシヤワール会の取り組み)
※ベシヤワール会は、1983年キリスト教系団体からパキスタンに派遣された中村哲医師の現地での医療活動を支援する目的で結成。パキスタンでのハンセン病医療から始まった活動は、山岳巡回医療、アフガン難民医療へつながり、さらにはアフガニスタンでの井戸掘削、用水路建設、農業支援、イスラム神学校建設など現地住民の生活全般に関わる事業へと拡大しました。こうした支援活動は、ベシヤワール会員や支援者の会費、寄附によって支えられています。